

日本原子力学会関西支部賞に際して

堀池 寛
大阪大学名誉教授
生産技術振興協会理事長
日本保全学会西日本支部長

この度は名誉ある日本原子力学会関西支部賞(功績賞)の受賞に際しまして、まずは御礼を申し上げます。はからずもこのような賞を頂戴しまして、名誉に思うと同時に大変に恐縮いたしており、今後の原子力と放射線の研究と発展に少しでも貢献するべく気を引き締める思いでございます。原子力は人類の継続的な発展を可能とする究極のエネルギー源です。100年200年後の人類は化石資源は化学製品に振り向け、運輸には水素や合成燃料を使い、電力は原子力に頼る時代になると予測されます。しかし我が国の原子力の平和利用は広島長崎と言う負の歴史があり、ハンディを抱えて出発しています。更に福島事故がおきて相当な挽回が必要な状態にあります。一方再生可能エネルギーは送配電も含めた全貌も不明のまま急激に拡大され、電力の安定供給で大きなリスクを抱えています。人類の持続的な社会の発展のためには原子力発電を効果的に使うことが、脱炭素も併せて実現できる手段であり、その上で再エネも使いこなすことが出来ることを説明していくことが重要です。福島事故以降、福島の復興と廃炉に取り組んできましたが、ここに至って次世代炉の開発にも力を入れるべき時期になってきました。過去には原発の技術は安全性の証明と確認に時間がかかるため小さな改良でも簡単ではないとか、軽水炉は完成された技術で改良研究は必要性が薄い等の議論があり、その結果我が国が世界に誇るカイゼンの取組みを抑制することとなり、稼働率の低下にも繋がりました。これは我が国の技術開発システムでの良くない例であり、今後は新規制基準に見合う力強い推進体制を採ることで、全体としてバランスの取れた開発体制にする事が重要で、研究開発の重要性もその点にあると考えます。以上簡単ですが御礼の言葉といたします。